

春夏秋冬

台湾徒然



第53回

海峡の狭間で

バタイ(巴代)という作家のノンフィクションが話題になっている。『走過・一個台籍原住民老兵的故事』というタイトルで、プユマという小さな民族の青年が、大戦後まもなく17歳で国民党兵士として海峡を渡り、47年ぶりに故郷に帰ったという実話を取材したものである。

日本の降伏とともに太平洋戦争は終結したが、台湾の人たちに「戦後」はこなかった。日本に代わって君臨した新しい支配者は、また新しい戦争を台湾に持ち込み、人々を巻き込んでいった。「国共内戦」だった。

かろうじて日本による動員を免れた少年たちを対象に、中国国民党は、高額の給与を提示して「作業員」を募り、少なからぬ原住民青年がそれに応じた。目的地も告げず、戦況も教えず、号令だけで海峡を越えて最前線に送られた。しかも彼らは自分が戦闘員になったことすら知らなかったという。私自身

も、兄は日本軍属として南洋に、弟は大陸の戦地に送られ共産党と戦ったという兄弟に出会ったことがある。二人は互いの消息を知らないまま戦後を海峡を挟んだ兩岸で別々に過ごし、近年になって北京で奇跡の再会を果たした。少数民族の悲哀を象徴するような時代であり、事件であるが、その全容はいまも闇に包まれたままである。

2010年秋、ときに台湾は選挙戦の真つ最中。台北市をはじめ主要五大都市の首長と議員を選ぶ重要な選挙である。与野党のエースがそろって立候補し、2年先の総統選の前哨戦とも言われている。地方選ながら争点は、中国大陸との距離。いまなお対岸に強い警戒感を持つ人もいれば、二人三脚で世界をのして行こうと言う人もいる。台湾の岐路にあたって、原住民の人たちはどのようなスタンスをとろうとしているのだろうか。全人口に占める割合は2%ながら、彼らの存在感は

無視できない。それは島内で主導権を争っているのがいずれも漢民族同士だからである。さらに中国政府も異民族の彼らを腫れ物に触るように取り扱ってきた。

しかし、台湾原住民がこの島の主人公になったことは一度もない。オランダ、スペイン、そして清国、大日本帝国、中国国民党と次々に海の向こうから支配者が現れ、先住者であった彼らをさまざまに利用し、食いつぶしてきた。

彼らを徹底して利用したもつとも顕著な例は、太平洋戦争中の徴用と徴兵



台湾原住民作家・巴代の新書

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きる』『台湾先住民・山の女たちの聖戦』『タロイ峡谷の閃光』(以上現代書館)、『台湾革命』(集英社新書)、『明治の冒険科学者たち』(新潮新書)など。元日本軍人軍属の最後の声を綴った『台湾戦後65年』(<http://www.taiwanseigo.jp>)を更新中。

であろう。青壮年期の健康な男児は根こそぎ動員つくされたとみる。わたしが取材を続けてきた20年間に原住民集落で出会った一定年齢以上の老人で、兵隊に行つてないという人に会ったことがないからである。正確な記録はないが、その多くが南洋の激戦地に送られたこともあり、生還できたのは半数に満たなかったといわれる。

そして彼らの帰還を待たずに、その弟たち、息子たちが国民党に徴用されていった。台東県で会ったとある老人は、日本に留学できるという言葉に操られ、そのまま国民党政府のスパイに仕立てられ、日本のパスポートをもって北京に渡り、後半生をそこで過ごすことになった数奇な人生を語ってくれた。

外来の支配者に翻弄され続けてきた台湾原住民、その母なる島の岐路に際して、彼らはどのような選択を下すのであろうか。